097　奴隷　051220

布留川正博著＜奴隷船の世界史＞

◎奴隷貿易は外国のこと、過去のことと思っていた。アフリカ生まれの黒人が奴隷として、労働力として売買され、輸送されてきた話が乗っている。本の「はじめに」ロビンソン・クルーソーのことが載っている。

◎400 年の間に 1000 万人の奴隷が連れてこられたという。1000 万人という数字は大きく誤差があるようで、もっと多かったかもしれない。また、運搬途中の死亡も相当あったようだ。奴隷なんだから、人じゃないんだから、とはいえ商品なんだから、数が減っては大きな損害が出る。

◎歴史的にみて、15 世紀ポルトガルによって始められた大西洋奴隷貿易は、やや遅れて、オランダ、フランス、イギリス、デンマークなどが参入していった。

◎15・16 世紀には、ヨーロッパやアフリカ沿岸地域に運ばれる奴隷が多かった。ポルトガルのリスボンは人口が 10 万人のうち 1 万人が奴隷であった。

◎ヨーロッパの商人はヨーロッパ産の品物を船に積み、アフリカでヨーロッパ産の品物を売る。アフリカで奴隷を買って船に積み、そのままヨーロッパに帰ることもあるが、南北アメリカ西海岸に運び奴隷を売る。南北アメリカ西海岸で産物を積み込みヨーロッパに帰る。

◎英領北アメリカでは、南北戦争 1861 年～前に 400 万人の奴隷数があった。しかしアメリカでは、18 世紀末から、奴隷の飼育、すなわち黒人奴隷同士を婚姻させ、もうけた子供を新たに奴隷とすることが利益の上がる事業として成立し、南部の綿花プランテーションにそうした奴隷が数多く売られていた。

◎18～19 世紀初頭に奴隷貿易総数の 6 割が集中し最盛期を迎える。ヨーロッパの奴隷商人がしのぎを削り、プランテーション経済が発達し、奴隷の需要が増えた。カリブ海諸島とブラジルに 80%集中している。

◎16 世紀半ばには、南北アメリカ大陸で、今のアメリカとブラジル以外はスペイン領だったとは・・。その後どんどんイギリスの勢力が増してくるらしい。

◎西インド諸島では砂糖、アメリカでは綿花、ブラジルではコーヒー。これらの地域の原住民には、キリスト教の布教と金の探索があった。先住民の反乱に対し殺害、捕虜、奴隷としてスペインへ。強制労働、反乱、鎮圧、奴隷、強制労働のサイクルができあがった。

◎アメージング・グレース：ジョン・ニュートン作：奴隷船の船乗りであったが、後半牧師となり、「黒人奴隷貿易に関わったことへの悔恨　神から許しを得たことへの感謝」の歌を作った。

◎英領西インド諸島：キューバの近所の島々のこと。15 世紀末コロンブスが到達した島々をインドの一部と考えた。のちにインドと区別するために、西インド諸島と呼ぶようになった。スペイン領・フランス領もある。

◎ロビンソン・クルーソー：主人公はイギリスのヨーク市生まれ。船乗りとなって出航するが嵐に遭遇したり、海賊に襲われたりで、囚われの身分となり、モロッコでイスラム教徒ムーア人の奴隷となる。脱出してブラジルに渡り農園経営に成功する。27 歳の時、アフリカに奴隷を買い求めに行く途中に、船が難破し、絶海の無人島にただ一人流され生き残る。私はまわりを見まわし、自分が今どんなところにいるのか、これからどうしたらいいのかを考えはじめた。すると助かった喜びも衰えてしまった。私は助かったようだが、恐ろしい状態にいるのだ。身体はずぶぬれ、着替えもなく食べ物も飲み物もないのだ。餓死か野獣に襲われるか。持ち物はナイフとたばこだけだったが、沖合に座礁している難破船から物資を運びだした。彼は神と対話し、日記をつけ、犬、猫、オームを飼い不安と絶望の日々を和らげていく。病気と闘い、住居や貯蔵庫を作り、狩り、農耕、山羊を飼うなど原始生活をつづけた。まだまだ続く・・。

◎夏目漱石の書評が面白い。

　○作者は決して詩にふれない男である。頭から詩を軽蔑した男である。

　○ロビンソン・クルーソーは、椅子を作ることや山羊を飼うことばかりを考えている。イギリス人一般のことだが、頑強で神経愚鈍、実際的である。仕事は成功させる。イギリス人に対する酷評が続く。

098　展覧会-1　081220

◎コロナ禍め、またもや勢力をぶり返し、びっくりするような感染者の数字が連日発表される。まったく、いやだねえ。数字の割合から死亡者が少ないので一応安心はしているが、65 歳以上の高齢者は要注意だという。ということで、2021 年 3 月の展覧会は二年続けて中止かな。

◎日本人はなぜ死なないのか調べてみた。コロナで死んだと思われる数字、「超過死亡」がほとんど上がっていないようだ。人口 10 万人当たりのコロナ死亡率。イギリス 66 人、アメリカ 39 人、メキシコ、22 人、日本 1 人。アジア各国は日本よりまだ低い。

◎コロナ禍以降は、出歩くのは嫌だ、展覧会をしても来てもらうのが気の毒だ、まして濃厚接触をしなくっちゃ、パーテイができないのでは、あまりにも淋しすぎる。てなわけで、WEB の展覧会を試みようと奮闘中。「みたってや～」と宣伝してもさほど見る人はいないだろうけれど、「ま　いいか」というノリでまずは解説文を当ブログで進行中なり。

◎「WEB　EXHIBITION」これであっているのかな、おかしな英語じゃないだろうか、まあ、これでいいかあ。

◎最近ショックなことがあった。いつも使っている絵の具、ゴールデンが日本で買えなくなるようだ。大阪の某メーカーが代理店を解消したようだ。「ぼけめ　勝手なことをするな　どうしてくれる」という情けない話だ。もう何十年もその絵の具を使っている、困ったことだ。この絵の具を紹介してくれたのが、アメリカ在住の YUZO 氏 78 歳ぐらい、まだ多分生きてはいると思うが相当衰弱しているようだ。2.3 年前に、「帰るから　泊めてくれ」と電話があったきりの寂しい話だ。

◎おもしろい事を考えている。「宇宙に　形はあるのかな」「そらあ　人なんて　手のひらに乗る　カスミのような」「すぐにはじけて　消えてしまう」オレなんて、それこそ小さい　それこそ一瞬。

◎絵とは、簡単にいえば、四角い画面があって、そこを色と色で分割しているだけ。色と色の面積が画像だ。色と色のせめぎあい、この妙が上手くいけば最高の絵になるのだ。

◎「いい絵とは　どんな絵」と聞かれて「そらあ　君が好きな絵なら　いい絵だよ」と答えた。「感じるままに楽しんでください」「お～い　いい絵　描いているか？」と見てきて下さい。

◎「いい絵とは　どんな絵」と言われると困るが、「そらあ　いい絵でないと　だめだ」とはオレの常套句です。うまい絵も、きれいな絵も、高く売れる絵も、みんなだめ、だめだよ。素直に、けれんみなく、化粧のための化粧もない、そんな絵がいいのだ。そらあ、オレも「いい絵だね」と言われたい、かな。

◎久しぶりにいい絵ができあがった。「うれしいね　これこそ　乾杯もんだ」本当は 3,4 年前に描きあがっていた絵だけれど、今回すったもんだとあがいたうえで、一・二手と筆を入れた。まったく違ったものになった。だからできあがった日付を変更した。

◎風を感じますか？水を感じますか？宇宙を感じますか？

◎パイプオルガンを弾く人：パイプオルガンを奏でる若い娘さん、足でペダルを踏んだり離したり、手で鍵盤を叩いたり押さえたり、部屋の空気が踊っています。

◎ピアノ弾く人：大きなグランドピアノ　上のふたが開いている　大きく開いて中の弦が見えそうだ　音がどんどん　広がって　ころげまわって　聞こえてくる

◎ダンス：手をまげて　足をあげて　腰をふって　スカートが舞う

◎ダンス：くねるくねる　まがるまがる　はねるはねる　オレも　あんなに舞いたいよ

◎絵の描き方の話ですが　その画を描こうと決めて　筆を入れていく　4,5 回目にうまくいって　8,9 回目にきたなくなってきて　ムム　と考え　白い絵具できたないところを消してみる　また描いたり消したり　こんな作業がずっと続く　ま　こんなことが　わくわく　楽しいのです

099　展覧会-2　091220

◎キャンバスを二枚つぎ合わせた絵が多い、二枚つぎ合わせた絵を描くのが気に入っている。二枚つぎ合わせた絵が調子に乗っている。なんで、と問われれば、「そらあ　扱いやすい　移動しやすい　収納しやすい」利便性や合理性だという答えが返ってくる。二枚つぎ合わせると、つぎめを注意して意識する、「ずれていないかな絵の具が載っているのかな・・」この注意や意識が、オレの感性やら心情やらの琴線に触れる。利便性や合理性が、感性やら心情やらを呼び起こしてくれている。

◎「わたしはわたし」という題材の絵をたくさん描いてきた。顔があって、手があって、足があって、そんな具象の姿がどこかに吹き飛んで、斜めの太い線やら、まるやらの、集合になってしまった。

◎わたしはわたし：この題名は、もともとは、肖像画なのだ。自分の顔、あなたの顔なのだ。それがこうなった。

◎わたしはわたし：これは人を描いた絵です。私とあなたと君が寄り添い、話し、笑い、泣いています。明日もね。明後日もね。

◎わたしはわたし：　顔の絵だ。「へのへのもへの」と顔の絵を描いたのは少年時代。そんな幼稚な事を今もオレはしている。この絵はそんなオレなりの「へのへのもへの」である。紀元前何千年という大昔の形象文字、馬やら魚やらの絵から文字になっていったのと同じ

◎昔、教科書に載っていた一休禅師の肖像画を見たとき、「あ、オレに似ている」と思った。渋くて素朴でいい顔だと思っている。一休さんは漫画にもなり人々に親しまれた人だが、天皇家の一族で、当時も今も、権力財力の権化のような人だったかもしれない。

◎絵の具の数は多くない。赤色系が3,4色・青色系が3,4色・緑色系が3,4色・黄色系が3,4色・そして、白と黒。そんな絵の具たちが箱の中に入っている。絵は、赤・青・緑、それらのどれかをメインに使う、黄色はアクセントに、お色気に。黄色を少し画面に刷くと、絵がいちどに華やかに、色っぽくなるんだぜ。それと、白と黒は欠かせないねえ。

◎白いキャンバスに、3回ぐらい筆をおろす、たっぷり絵の具をこすりつけ、色を刷く。「お　この絵は　いけるぞ」と喜ぶ瞬間が増えてきた。昔はそんなことが年に一回ぐらいしかなかった。「いけるぞ」この独り言は嬉しいねえ、こういう絵は、そのあと2,3回筆を刷くと出来上がる。絵の具がたっぷり載っている。

◎何度も筆をおろし、「なかなか　よくならないねえ」という絵が山のように積みあがっていく。失地挽回とばかり足を踏み込み続け、にっちもさっちもいかない泥沼に入り込んでしまう。泥沼を楽しんでいるのかね、と言われかねない様だけれど、本当はよくないことなんだけれど、泥沼には抜き差しならない快楽もある。「どんな快楽だって？」それは引かれ者の小唄かな。引かれ者とは、捕らえられ、引き立てられる様だそうだ。

◎4.5 回色を刷いただけで完成してしまう、「まだまだ白地の部分が残っているぞ　いいやこれでいいのだ　完成だ」これはオレの資質だね。二十歳代から、描きはじめた状態の時に、「おおお　いいじゃないか」とよく褒められた。これで筆を置けばいいのに、「いやいや　これから　描き込むぞ」これがいけなかった。50年経った今も、「いやいや　これから　描き込むぞ」という賤しさは無くなっていない。

◎サイクリングヤロウズ：自転車に乗って走る姿だ。

◎風をきって　走れ　走れ　川がある　海がある　森がある　草むらがある　山がある　はしれはしれ

◎はしれはしれ　あっちの方へ　そっちの方へ　ペダルを漕いで　まえへ　まえへ

◎ゆっくり　走ろうぜ　ゆっくり　まわりを見わたして　ゆっくり　楽しもうぜ

◎タイヤが太くなれば　オートバイだ　ドッドッド　ハーレーの団体だ

◎オレの絵の中で、唯一具象の香りが残っているのが、自転車の絵だ。まるを二つ描いてフオークの線をいれれば、自転車ができあがる。

◎オレ、いまだに自転車は欠かせない。かっこいい、グッドデザインのものには縁がない、ママチャリだ。

100　ぼやき　131220

◎なんだかんだと言っても、もう年の暮れ、オレの誕生日が迫ってきた。年の暮れなんて他の皆様方と同じように言っているが、「オレの人生　オレの生活　毎日が日曜だ」なんて俗っぽい言い方もあるが、正直な話、「正月も年度末もあるもんかい」と啖呵を切れるようならたいしたものなんですがと、苦笑い。年の瀬だとか、年が明けるとか、オレの生活にさほどかかわりがないが無いけれど、人並みに、正月の話をしたり常識人ぶったところの気持ち、このばかばかしさが、「オレも　日本人なんだねえ」なんてふと、これまた苦笑。

◎「ほんま　今年は　あほうな　コロナめの　おかげ」たいがいに不快な日々を過ごしてしまった。不快ということでもないんだけれど、何となくはっきりしない、何となくうっとおしい一年だった。皆様と話していても、それじゃ次回の計画は、と話が弾んだ最後に、「コロナが　落ちついてから　だねえ」という最後っ屁の言葉が引っ付いてしまう。これじゃ、コロナ禍が収束しない間は、何もしない何もできないと宣言しているようなもので、まったくもって不快なものです。何がどうなっているやら、何をしていいやら、わからない日々です。

◎次はいい話、オレにとってはワクワク、最高にうれしい話。50 号（117 ㎝ｘ91㎝）の絵の話。いつもの、「走れ」シリーズの絵を描き始め、3 色 4 色と筆の勢いにまかせて色を置いていった。5 色 6 色と画面が進むうちに、なんだか絵が汚くなってきた。「あれれ　いつもの　ドツボ　か」何日か、思案げに考えた末、思い切って白い色を筆の勢いにまかせて滑り込ませた。「あ　いいな」とは思ったが、「ちょっとちがうな」とも思った。思案そして思案。「いい部分がある　絵なんだけれど　あちこちが汚い　まとまっていない・・」そうだ、河原で考えたんだ、走りながらどうしたらいいかと思案していたときに、「クレヨンで　場所を決め　ほんの少しずつ、色を入れてみたら」これがひらめいた。ひらめきを、「これは神の啓示　ミューズの神が　オレにそっと　方向を指差してくれた」なんて話の進み具合なら絵になるような話だけれど、ただ、ぼそりと、思っただけだ。

◎いつものアトリエでのオレは頭の中で、「この色を　ここと　ここに　置いてみよう」と絵の具を作り、筆に絵の具を含ませ、筆を動かしていく。ここと、ここだけに筆を動かし、さっさと筆を置けばいいのだけれど、筆が動く、筆が走る、筆が跳ねる、筆の動きが止まらない。筆が止まらない状態の気持ちのほとばしり、情熱、昂ぶった感情が上手いぐあいにいくと最高な絵ができあがるのだけれど、失敗することの方が多い。一つ二つと決めた段階で筆を置けばいいが、ほとばしりや、情熱や感情がと、そう思った時にはすでに遅く、筆が走りすぎている。それで今回の話だが、それを制御するために、クレヨンで、2.3 か所印をつけて、そこだけに絵の具を置いてみる、ほんの少しおいてみる、この方法を試してみよう、ひょっとすれば成功するやも・・、これが今回の作戦だ。

◎絵の具のハネが飛び散ったり、絵の具に雫がポタリ落ちたり、これも上手くはまれば素敵なえくぼ、かわいいワンポイントになるのだが、失敗であったり、汚れであったり、余計な部分であったりする。そんな部分を小さい筆で、まずはこの色を、失敗部分を消し、汚れた部分をきれいにし、余計な部分を直していく。次はこの色、その次はこの色、こんなことをやりすぎると、絵がこじんまりするので、やりすぎないように少しずつ、絵の具の勢いを残したままで、いい塩梅にしていく、これが成功すれば文句なし、なんだよ。

◎で、今回は、この 50 号の絵、なかなかに上手く仕上がったと、ほくそ笑んでいる。ならば誕生日の日付サインをと、した。

◎河原の中、今日は寒い。来週は本格的な冬将軍がやってくるとか、まだまだ寒くなるだろうが、今もすでにもう寒い。陽が隠れているので余計に寒い。上も下も二重にジャンパーとズボンを着こんでいる。

◎タイヤチェーンを買った。5500 円なり。雪国に行ってみたいね、雪山の麓に行ってみたいね。

◎かんちゃんが、スズメの数を数えているという。春からずっと数えているという。河原にはスズメはあまりいないのかな。いつもの常連たちは、土手の上、河川敷、水の上、やかましく飛び回っている。

101　遠野奇談-1　171220

佐々木喜善著＜遠野奇談＞　子殺しの話。

◎遠野物語の著者、柳田国男は東京の自宅で佐々木喜善から話を聞き、遠野物語を発刊した。その中には、山や里、家の神をはじめ、山男、山女、天狗、河童といった妖怪や、狼（おいぬ）、熊、狐などの動物が登場する不可思議な話が数多く含まれます。序分には、「之を語りて平地人を旋律せしめよ」とありますが、こうした話に戦慄したのは、ほかならぬ柳田自身だったに違いあれません。佐々木はのちに遠野に帰り、昔話集を刊行した。

◎子殺しの話。いくつかの昔話が載っている。この話を読んで、良寛さんの時代の飢饉を思い出した。江戸時代に教科書で習った大飢饉が 50 年ぐらいのサイクルであったようだ。なんと一回の飢饉で日本人が百万人単位で餓死しているらしい。ちなみに、太平洋戦争は、軍人 200 万、民間人 100 万の３００万人が亡くなっている。次々と枚挙にいとまのない数字を並べたところでせん無い事だ。それではそれではと疑問視を広げ、死者の数を知ったところで仕方のないことだ。ただ何十年に一回の割合でそういう数字の死者が出る世の中の不思議、というよりサイクルなのかもしれない。

◎現代から見れば、飯が食えなくて死ぬ、育てられなくて子を殺す、あり得ないことだけれど、飢饉だ、戦争だ、屍が累々の並んでいるのは当時は普通の光景かも。平安時代の加茂川河原に塁々の光景が目に浮かぶ。

◎天保の大飢饉：江戸四大飢饉のひとつ 1833～大雨による冷害と洪水の被害が東北地方を中心に広まった。

◎秋田藩肝入り：長崎七左衛門：幼児は捨てられ、父母を探し迷う姿は、まるで地獄である。路上での追いはぎ、強盗の様は修羅場と言える。かわいそうにと幼児の手に食物を握らせると、その親が奪い取り自分で食べてしまう。まったく親兄弟の情もなく、畜生道という有様。

◎天保凶飢見聞記：倒れた馬にかぶりつき生肉を喰い、行き倒れとなった死者を狼や鳥が喰いちぎる。

◎秋田飢饉誌：通町橋から六丁目橋の下まで、橋の下は集まった浮浪者で一杯となった。死人をムシロに包んで背負いながら歩く者、橋の下で子を産む母親、親子兄弟に死に別れ、悲しんでいる者、途中で子供を捨ててたどり着いた親など様々であった。通町橋など午前十時になると、二百人以上の浮浪者が両側に立ち並んで物乞いをし、通行もままならない。夜など物騒で外出もできない。秋田藩の 40 万のうち死者が 10 万人とも。

◎悲惨極まる餓死村の話＜遠野奇談＞

奥州における天保年間 1830～1844 の飢饉のときの惨状を、時折村の老人どもが話すのを聞くことがある。今そのうちから子供らに関係した二三の話を記してみよう。

　村の別当の家に、十一とかになる男の子があった。そのころ年々打ち続く飢饉に、家でもろくろく食をせぬので、その童は外に出ては、他人の家の軒下に積んである豆殻のあたりで、落ちている豆などを拾って食べていた。ところが、それが村の評議となって、肝入りが別当の家へかけあいとなり、その後一切その男の子を外に出さぬということで、やっとことが落着した。

　けれどもその童（わっぱ）は、その後も夜など時々出ては、村の家々を回って歩くので、村ではまた別当の家に再度かけあいをすることになった。その時別当の答えは、「いかにも村方へご迷惑を相かけぬよう始末を付けましょう」というのであった。

　ある日、別当の父が、その童を連れて山に行った。何か木でも伐に行くのかというふうで、父親は大斧をもって、先に立って歩きながら、いつにない親切な言葉を童にかけた。童はそれを心から喜んでいそいそといった。そうして坊子沢というところにさしかかったとき、「あんまりくたびれたから　この岩でちょっと休んでいこう」と父は言って、童と一緒に岩の上で横になった。

　ところが幾日も、ろくろく物も食べないで疲れ切っていた童は、すぐさまやすやすと眠ってしまった。そこで父親は大斧で子供の頭をきり割って殺してしまった。

102　ぽんぽん山　201220

◎山に行きたいと思いつつ、日ばかり過ぎていく。「ええい　いくぞ」と家を出た。水と食料、カメラと IC レコーダー、ダウンのジャンパーも。食料は少ないので、途中のコンビニで調達しようと、自転車に乗った。この一週間は寒かった、寒波がやってきた。アトリエの温度計が朝方は、5 度 8 度ぐらいなので、極寒というほどではない。雨がない、もう一か月ぐらい降っていないのかな。東北や北海道は大雪らしい。

◎摂津峡の中を歩いている。この辺りは常緑樹が多いのか、「枝ばかり」という風景ではない。まだ、オレンジ色の柿の実が、枯葉が道に散乱している。

◎ランニングの人たちを多く見かける。小さい荷で小走りで駆け抜けていく。オレ、足が遅くなった、鈍足だ。

◎11 時、上の口にやってきてうろうろしている。自転車の途中で弁当を、これをすっかり忘れ、下の口をちょっと迂回したがそんな店は無い。上の口で春に寄った売店とまたまた迂回したが、今日は休店。「あちゃ～」である。中ぐらいのおにぎり、分厚い特性サンドイッチ、リンゴを一個、それだけだ、腹減りのオレ、もつかな。

◎11：40 いよいよ登山口。本山寺あたりまでの道だが、ほとんど人が通らない、熊用鈴を出してくくり付けた。

◎空気が冷たい、風はちょっとだけ、葉を揺らす程度、手袋はまだポケット、手は上着の袖の中にいる。ネックウオーマーは暖かいが、ゆるい登りでも汗が出るのでポケットにしまった。毛糸の帽子は頭に乗ったままだ。

◎1 時前に神峰山寺からの参道に合流した、曇ってきた、より寒くなってきた、ちょっと片隅に雪が残っている。

◎本山寺の鳥居に植木屋が緑に枝をぶら下げている。看板で読んで、「おお　そういう　めでたいものか」と右から左で忘れた。本山寺も神峰山寺も寺だけれど、立派な鳥居もある、「ま　これもよしかな」

◎山は一か月以上ご無沙汰のせいか、寒さのせいか、太ももの内側がつってきた、「これはいかん」と 5 分ほどじっと待っていたらおさまった。帰りも反対側の太もものうしろ側にきた、これもすぐにおさまった。

◎てっぺんには 10 人ぐらいの人たちがいた。にぎやかな山頂だ。すぐに失礼して、少し下でサンドイッチをほおばった。オレの徳製パンは旨いねえ。

◎3：30 本山寺の鳥居まで帰ってきたら、オレと前後して登っていた若い男女が焚火に当たっている。「おお　ぬくそう」とオレも焚火のそばに行った。彼らは京都から来たらしいが、彼女は上の口あたりで育ったらしく、懐かしくて登りに来たそうだ。「さむい　さむい」「そらあ　きみい　その恰好じゃ」上下の薄っぺらいスポーツウエア、車の中の恰好のままで、ぽんぽん山に来たらしい。上は零度に近いのかな、そらあ寒い。

◎神峰山寺の手前まで下りてきた。夕方のお陽さん、寒くない、もう手袋はいらない。時間を計算すると摂津峡あたりで暗くなるかな、帰りの自転車は真っ暗だ、気を付けなくっちゃ。

◎今朝、まだ暗いので 6 時ころかなとラジオを点けるとなんと 7 時だった。アナウンサーが、日の出の時間が 7 時だという。これから正月明けまでお陽さんがどんどん寝坊して、7 時だとまだ薄暗い。反対に日没はオレの誕生日の 15 日ぐらいを境に、昼が長くなっていくらしい。このメカニズムを先日知った。山を登るには、昼が長いほうがいいが、朝の薄暗いのも困りもんだねえ。

◎摂津峡を歩いていると、川の向こう側の木の上に白い塊、「でかい　真っ白い　ごみ袋でも」「なんと　シラサギ君たち　じゃないか」彼らはあんな木の上を塒にしているんだ。3 羽、5 羽とぽつりぽつり。

◎摂津峡の途中で暗くなってきた。ヘッドランプを出すまでにはいかないが、暗くなってきて、人もまったくいなくなった。食料が足りるかと心配だったが、まだまだ空腹状態ではない、自転車に乗ってコンビニを探さなくても帰れそうだ。

◎自転車のある場所はもう真っ暗。安全のためにヘッドランプを出し、芥川の土手を走った。6 時帰宅。

◎リンゴの話：今年は三人から立派な大きなリンゴをいただいた。食べるときは四分の一ぐらいにカットして、もぞもぞ食べている。甘い汁が身体に染み渡り旨いんだけれど、一個はなかなか食べられない。今日も食料が少ないのでとザックにでかい奴を一個入れた。食えるかな、と心配しつつ、登りの休憩時にナイフで半分にして齧った。「旨い」これはほんとうに旨かった。ヘタは齧ってポイ、一口一口いただいた。帰りの道中も残りの半分を食った。リンゴ一個を丸ごと食えた、「旨いねえ　うれしいねえ　ありがとう　山のリキが　ついた」

103　遠野奇談-2　221220

佐々木喜善著＜遠野奇談＞ざしきわらしの話。間引きの話。

◎鉈（なた）や煙草入れの踊り

◎早池峰山（はやちねさん）の麓、陸中の国上閉伊群附馬牛村（つきもうし）字生出（おいで）というて、人家がやっと十軒ばかりの村に、百姓で樺山という家があります。大正 12 年ころの話です。その家の二十歳ぐらいの息子が山から帰って深炉（ひぼと：意味不明：炉端のことかな）にあたり、山の道具を腰もとにおいて休んでいると、鉈がひとりでに飛び上がりものを切るように動く。それが丁度目に見えない者の手にあってそういう動作をしているようであります。息子が驚いて見ていると、鉈はガタリと元あった個所に帰ってきました。その代わり今度は斧が舞い上がってやはり木を切る真似をする。暫時すると息子の腰もとに帰ってくる。それからというもの毎晩そんなことが起こります。

　その評判が世に広がりもの好きな連中が、そんな稀有なことを実験しておこうと、わざわざ泊りに来ました。すると夜中にひとりでに懸洋灯（ランプ）がふっと消えて、それから何の声も聞こえもせぬが、寝ている人たちの上に荷物かが上がり、足の方から布団がまくられたり、枕が頭を載せたまま槍のように急激に上下して床板を打つ。とても数奇者（ものずき）も居た堪らなくなって、そこを逃げ出すというふうになるとのことです。

　附馬牛村（つきもうし）の狩人某が、それはきっと猿だろうという。大勢の者らとともに鉄砲をもって、「今夜俺が仕留めてくれるから」と話していたところが、狩人の腰から大事な煙草入れがすっと抜き取られ、どこかへ行ってしまいました。

　家の人たちはそういうことは慣れているので、「おら家の神様は　ハア　煙草入れを返してくれる時分　だがな」などと頻りに言いますと、「応　それっ」と言わんばかりにガタリとそこに煙草入れが投げ出されました。拾い取ってみると、いつもの例で中の煙草はみんなとって喰ってしまって無かったそうです。このお化けはひどく煙草が好きで、その家へ行ったもので、だれでも煙草入れを取られない者はないということです。

　それからその狩人は、「おのれ　人を馬鹿にするも　程があるというもんだ」と、鉄砲をとって部屋の隅の方へ差し向けると、筒先が自然と家族の人たちに向かってしまいます。引き金を引くどころの話じゃないのです。しかしこの人は無理にも泊まり込んだ果てに、ひどい目に遭い、とうとう座敷から外へ押し出されて帰ったということであります。

　隣村の福泉寺のお弟子が、このお化け退散祈祷のためにやってきました。家に入って祈祷を始めると、はじめのうちは別段何のこともなかったが、だんだんお経が進んでゆく頃、いきなりどこからか石コロが小僧めがけて飛んできた。するとあとからあとから石ころや棒切れが飛んできて、危なくて仕方ありません。

　まあざっとこんな話であります。猿がひそかに家の中に入ったとか、いろいろ憶測も出たようですが、何しろ姿も影も少しも見せぬものですから、誰もしかと断定は下せぬものらしいのです。ただそのものが非常に煙草が好きだということ、それからそれを家人が半ば恐れ、半ば神様のようにもいい、家の輿衰に関わるようにも考え、また魔物のようにも思うのであります。こういう心持は常にこのお化けにつきまとうています。

◎佐々木喜善は、ざしきわらしのことを、圧殺されて家の中に埋葬された子供の霊ではないかと述べている。東北地方では、間引きを、「臼殺（うすごろ）」といって、口減らしのために間引く子を石臼の下敷きにして殺し、墓ではなく土間や台所などに埋める風習があったといい、こうした子供の霊が雨の日に縁側を震えながら歩いていたり、家を訪れた客を脅かしたりといった、座敷童に似た行為が見られたという。

◎WEB でいろいろ探ると、日本人は性を謳歌する人種、なかなかにたのしんでいたようだ。江戸時代でも、有効な避妊法が無く、堕胎や間引きが主流であった。堕胎は、腹をもんだり、冷水に浸かったり、薬草を飲むなどの手段だった。子殺しは、手や布団で窒息させる、濡れた紙を顔に押し付けるなどがあった。多くの場合は、産婆である“とりあげババア”がおこなっていたようだ。明治時代まで、全国的に、慣習として残っていたようだ。

104　遠野奇談-3　241220

佐々木喜善著＜遠野奇談＞天狗の話

◎天狗のことを調べると、日本書紀に登場するという。空を飛翔するカラス天狗から、のちには山の中、修験道の山伏姿が主流となった。鬼と並んで活躍した妖怪で、鞍馬山や羽黒山や各地の山で幅を利かせた。先日登ったポンポン山の大杉は天狗の休憩所として、しめ縄が吊ってある。

◎今昔物語　巻二十第七話＜染殿后為天宮被嬈乱話＞

　染殿后は大変な美人だったが、「常に物の気に煩（わずら）ひ」数々の祈祷も効果が無かった。金剛山に、「貴き聖人」がおりそれを天皇が召した。聖人は断ったが、「宣旨難背き」により下山する。聖人が祈ると、「老狐」が飛び出し后は回復した。喜んだ大臣は、聖人の逗留を願う。

　滞在中、聖人は御帳のかげから后の姿を見て、「愛欲の心」をおこす。聖人は思い煩った挙句、帳の中に侵入するが取り押さえられる。獄中、「我、忽（たちまち）に死して鬼となる」「本意の如く、后に睦みん」と誓い、聖人は山で食を断ち餓死する。「鬼となる」

　天皇が后のもとに通うと、百官の前で后と、「艶ず見苦しき事」（睦みあった、ポルノだ。）

◎今昔物語では、鬼となっているが、善家秘話では天狗となっている。鬼と天狗は同じようにも記される。

◎遠野奇談：私の村に羽戸という家があり、幸助という主人、晩年は不幸で惨（いた）ましい最期をとげましたが、壮年のころは家柄から村中に権力（はば）も利（き）けて、極めて無法者で、まさかりで草を刈り、鎌で土を掘ったり、それは乱暴な真似ばかりしていたそうです。

　ある時、幸助が早池峰山に登る際、「その前山の薬師岳というに、天狗が住んでいるので、昔から誰もかけた者がないそうだ」と同者連れがいうと、この幸助は、「何、天狗の奴がいる？そんだら俺が行って見る」と言って、連れが止めるのも聞かずに、ずんずん山の中に深く入ってしまった。皆もこの男のふだんの振る舞いをよく知っているものだから、「自分がその気ならどうなろうと知らぬ」といった調子で、うっちゃっておいたということです。

　ところが同行者がお山をかけおろしてくると、カラノボウという山のところで、その幸助が何だか物につまされたような態で、うろうろしておりました。「何だ、お前はここにおったのか、どうした」と皆に問い糺（ただ）されると、幸助はやっと目が覚めたというような顔をして、「いやはや驚いた。皆が止めてくれるのも聞かずに、あの山にずんずん深入りし、ジダケや熊笹などを押し分け踏み分けて、やっと頂上まで登っていくと、そこに大きな岩があって、岩の上に大男が三人おった。前には沢山の金銀をピカピカと広げて弄り回して負った。俺が近寄ると、気色ばんで振り返ってみたが、その目の恐ろしかったことったらない。『俺は、早池峰をかけてきたが、途を迷うてここに来た』というと、そのうちの一人が、『そんだらば送ってやる。以来二度とここに来るな。目を塞げ！』という。俺は何もかもその男の言うなりになっていると、俺はどんと肩に担ぎあげられて、どこかに持ち運ばれる様子だった。そうしてたった今のさっき、ここのまたどんと下ろされて、『よし目を開け、おまえの連れが来る』と言ったかと思うと、たちまちその男は踵を返して山の中に入ってしまった。ほんとにたった今のことだ」という。「それみろ」といって、みなに戒められて、幸助は村まで無事に連れ帰られたということであります。

◎柳田国男：国内の山村にして遠野よりさらに奥深き所には、また無数の山神山人の伝説があるべし。里に棲む普通の人が村の集落で稲作をしていたのと対照的に、山の中で暮らし、狩猟採集生活をする人たちがいた。

◎文化文明が行きわたった今でこそ、日本人は日本語をしゃべり、おおよそどんな人でも、「話せばわかる」世の中だけれど、百年より昔の日本は、平地に住む人たちの文化世界、常人であり良民である人たちが日本の世界だったんだね。平地以外の山に暮らす人、海のそばで暮らす人も含めて、異人視されていたんだろうね。

105　ぼやき　311220

◎年末だ、いよいよ正月だ。「正月が　なんだというのだ」なんてことを言いながらも、オレの人生は正月が来て次の新年なんだ、正月が節目だ。4月1日がスタートという人もいるけど、4月1日のことはわからない。

◎なんてことを言いながらも、40歳代50歳代は正月には山に行っていたことが思い出される。登ったね、歩いたね。雪の被ったアルプスの山々に行くなんて、若い頃は思いもしなかったが、澤山さんに連れられてたくさん登った。娘がいまだに、「正月は　山じゃないよね」と毎年言われあらためて驚く。

◎河川敷の夕方の光がきれい、光がオレンジ色を帯び、目の前を左から右へ流れる。あの流れを捉えたい、安威川の河川敷、けっこう広い空間に、水があり、草があり、ススキがあり鳥が飛ぶ。音は少ないね、上を飛ぶ飛行機かヘリコブター、近くを滑空する鳥の羽ばたき、時折大きな鯉が跳ねる。近くを車にトラック、貨物列車や新幹線、土手の外は都会だけれど遮られて聞こえない。

◎先日、年末の墓参りに行った日、ちょっと遅いかなと思いながらもカメラを持って河原に向かった。走り出したのが4時半を過ぎ、「あれれ　もう暗くなるかな」といくつかの写真を撮った。「え　あれ　ヌートリアの親子」だいぶ暗くそのせいなのか、子連れだからなのか、二匹は逃げずに草を喰っている。「かめら　カメラ　逃げるなよ」いくつか写した。ネットを見ると、長居公園にある大阪市立自然史博物館の和田さんが、ヌートリアの情報募集と載っていたので、写真とともに送った。「冬場の　この時期に　子がいるとは・・」と返事もいただいた。ただ、ヌートリアは外来種なので、駆除対象らしい。

◎ヌートリアは10年ぐらい前から目にするようになったが、最近はちょくちょく目にするということは、繁殖しているということなんだろうね。いつもは河川敷で草を喰っていても足音が聞こえると、とことこ川の方に逃げていく、水の中にはいれば追ってこないと安心している様子だ。いちおう可愛い様子だけれど、さわってみよう、愛でてみようとは思わない。

◎春に川上さんの彫刻立体作品を見に行った。彼の創り方は、まず骨格なり、ボデイを、材木やら金属で作りその上に樹脂を塗り付けていく手法だそうだ。「あれれ　オレの　ランルくん　その方法で　発展しそうではないかな」と思いついた。半年間構想を温めていたなんて格好いい能書きをうなりたいのだが、ただ怠慢でうっすらと頭の片隅に浮かんではいたが、ほっておいた。いよいよ創ってみようかと始めている。

◎絵にしろ、立体にしろ、「いいものを　造らなくっちゃ　いけないよ」といつもの口癖だ。この、「いいもの」が難しい。「絵は　写真のように　きれい　ほんまもんのように　描けている」本来の絵の原点は、写実に写し取ることがスタートかな。「写真のように　きれい　ほんまもんのように」という要求のあるものにはこれでいいが、アートということになるとこれはアカン、これはいけない。同じように立体作品も「工芸品のように隅々まで　気配りができている　バランスが　ぴったりだ」これもアカン。アートということになると、観る者に気を配ってなんとする、自分に気を配らなくっちゃ。安全で危険がないバランスなんていらない。

◎オレは絵を描き始めたころから、きれいな絵、ほんまもんのように描く技術、こんなものは最初からなかった。きれいに描けなかった、似ても似つかぬものができあがった、「ならば　もういい、ケツをマクッテやる」というすんぽうで、好き勝手に絵の具をとばし、キャンバスに塗るつける、時にはそっと撫でてやる。そうだね、いつも絵を見て、というより睨んで考える一手、なんてことで、今に至っている。

◎いささか能書きが過ぎたが、金網を買ってきて、小ぶりの丸椅子ぐらいの笠を製作中。中にライトを入れるのだが、そう、照明器具なんですよ。提灯屋なら上手く紙を張っていくのだろうが、どうも不細工に進行している、これがオレの真骨頂なのかな、と苦笑。いびつな形の提灯風ずん胴、どこを膨らませ、どこをくびらせるか。まさか岡本太郎じゃあるまいし、角やら顔やらは創らないよ。ま、進ませながら考えていこう。どんなものができあがるか、次回の展覧会には、「ランル君ライト」てなことで出品しようかな。

◎無事、誕生日が終わり74歳になった。結果はまだ出ていないが健康診断は済ませた。高齢者講習を受け運転免許証も正月早々には警察へもらいに行かねば。皆様、来年もよろしくね、と挨拶したいが、これも余計なこと、あいそ無くゴメンね、ただ無造作に、喰って寝て、日を過ごそう。